



引

つ越して一月が経とうとしている。夜中ふと目が覚めて、「ん、ここはどこかいな」とすぐには分からぬ時があつて、まだどこ

かよそに來ているような気持ちが残っているが、だんだんと慣れてきてはいる。自分が育ち、また一時は二世帯で暮らしたこともあるところなので、新しい地に移ることを思えば、ずいぶんと気が楽だ。

両親が他界し、実家を引き継いだとき、いずれはここに住むのだ、とは思わなかつた。更地にして売り、どこかに新しく建てるか、マンションを購入するか、それともずるずると賃貸に住み続けるか。ぐずぐず考え続けたが、結局そのいずれにも踏ん切りがつかなかつたのは、幼いときに繰り返し聞かされた母親の言葉が思考や行動を規制しているからだつた。

「おじいさんがうちの山のいちばんいい木を出いで、こした。親戚がどげん反対しても頑として聞かんだった」

聞く度、山仕事をしていたり、囲炉裏端で柴を折っている祖父の姿が重なつた。

この人たちに依頼しようという建築士夫妻が見つかつたとき、ぼくは、実家を解体して新築するつもり材は再利用できるのかと聞いた。

「できません」

きつぱりと廃材になるしかないやと聞くと、リノベ

ション以外に選択肢はないと思えた。松江の里山で育ち、炭素を閉じ込めたまま六十年家族を支えてくれた木をぼくがただの二酸化炭素にして放出したとあつては、両親や祖父母に申し開きができないと考えたのだ。問題は、かなりの歪みが生じた家がリノベーションに耐えられるかどうかだつたが、他社が新築の一択のように言ってきたところを夫妻はむしろ遺す方に興味を示してくれた。

いざ、工事が始まってみると、それが大変に手間のかかることで、リノベーションなんて、と歯牙にもか

けなかつた業者の言うことももつともだつたが。下見に來た棟梁は、「年寄りの大工集めます」と言つた。聞くと、若い大工には無理だと言ふのだ。一つ一つどういふ細工になつてはいるか見て取つてそれに合せて作つていかないといけない。そういう仕事は経験のある年寄りにしかできないということだつた。

ぼくは少し臆して、

「それはおもしろいことでしょいか」

と遠慮がちに聞いた。棟梁はにつこり笑つて、

「はい。おもしろいです」

と言つた。絶えるほかない技術にぎりぎり間に合つたのだと思つた。

老い老いに

木幡智恵美

33

夕

焼け通信は一九九九年四月、七年目に突入した。長女は高校二年生、長男が中学校入学、二男が四年生、私は一向に慣れない中学校での勤務二年目を迎えることになる。

子どもたちはそれぞれ大きくなつたが、子育ての悩みは尽きない。行動範囲、興味の幅が広がる分、問題は大きくなる。時には義母も巻き込み、家族全体が陰悪になることさえあつた。仕事のことで私に気持ちの余裕がなくなつていたことも原因の一つかもしれない。

そんなこともあつて、春休みは家族全員で息抜きに岡山へ一泊旅行にでかけた。近所に住んでいたKさん一家が、ご主人の転勤で岡山へ移り、遊びに來るよう誘われていたのだ。Kさん宅も子どもが三人居て、長男と二男は同年代だつた。一緒に山に登つたり、海へ行つたりと家族ぐるみで仲良くしていた。仲が深まつたのはKさんの長男が交通事故に遭つてからだ。事故後五日間意識が戻らないということで、長男と一緒に見舞いに行つた。病室に入つた際に目が合つた途端、「ぎつつあん、ぎつつあん、ぎつつあん」とK君が息子の名を連呼したので。事故後初めての発語だつたので、お母さんはいたく感動された。

岡山市内に一泊の宿を取り、家族で向かう。待ち合わせ場所で久々にK君たちに会えた息子たちは大はしゃぎ。K君は、「ぎつつあん」の発語をきっかけに少しずつ言葉を取り戻し、しばらくは後遺症に苦しんだもののすっかり元気になり、岡山での生活も順調とのこと

で安心した。二人の息子はK君宅でもう一泊し、私たち夫婦と娘、義母は松江に帰つた。実は二人だけでバスに乗って帰るということで、事前に練習をさせていた。ところが、それが冷や汗ものだつた。出雲に向けて、私は車、息子たちは乃木駅で電車に乗つた。莊原駅で降りるよう言い、一足先に駅に着いた私は改札口の前で待つ。二両編成の電車の後ろの車両に乗つた二人が降り口に向かって歩くのが見えた。だが、二人が向かうのは前の車両の出口ではないか。そのうち電車が発車してしまつた。慌てて車に戻り、次の直江駅まで車を飛ばす。と、線路わきの道路を必死に走る二人の姿を発見。ほっと胸を撫でおろしたのだつた。

そういうことがあつたので心配しながら駅に迎えに行くと、二人はもたらうエクスプレスから無事降りてきた。もつともバスは降り口が一つだが。

30代フリーター AIの進歩で生じる倫理上の問題として、責任の所在の曖昧化▽差別の再生産▽プライバシーの侵害・監視社会化▽経済格差の拡大▽人間の主体性の低下などがあげられている。

年金生活者 それらはどれも従来の問題の延長線上にあるものだ。AIに固有の倫理上の問題が本格的に問われるのはもつと先のことになるだろう。

「先のこと」とは、AIの飛躍的な進歩で、ほとんどのモノやサービスが自動生産され、無料で供給されるようになったときのことだ。それはこれまでの人類史を支配してきた富の稀少性がゼロになった状態、欠乏が消失した状態を意味する。

吉本隆明は前世紀の終わりに、資本主義の高度化にともなう消費の過剰化で「欠如」を前提にした倫理が危うくなり、それに代わる新たな倫理が求められていると指摘した。

それがさらに進んで、モノやサービスが自動生産され、働かなくてもそれ

妬「憤怒」が生まれる。「欠如」を埋めれば、それらは消滅するが、現実には不可能なことなので、代わりに美徳を対置し、悪徳を抑えようとする。

だが、そうした悪徳を生んでいた富の稀少性は資本主義の高度化によって急速に縮減し、AIの進歩によって、将来は稀少性がゼロになる時がくる可能性が出てきた。そうすると、それらの美徳は根拠を失う。そのとき、「欠如」を前提にしたこれまでの倫理は「充足」をもとにしたものに変わらざるを得ない。その兆候を若い世代の倫理観に見ることができる。

30代 それを示すデータはあるのか。

年金 電通が2021年7月に、12カ国（日本、ドイツ、イギリス、アメリカ、中国、インド、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナム）を対象に実施した意識調査によると、日本の若年層（18〜29歳）が関心のある社会課題としてあげたもののうちトップは「人種差別」の47%で、「経済停滞」の18%を

らを手に入れられるようになった状態は、吉本が資本主義の後の社会として想定した「個々人が、いかように自由にするまでも、相手の自由を侵害しない、優劣というものが生じない社会」（『超「戦争論」下』）に近づいた状態ということが出来る。そこでは、自由を守ることが出来る。尊重することも、少なくとも経済レベルでは解決済みの課題となる。

そうなったとき、倫理上の主要な課題は別のところに移る。吉本が晩年に提起した「人間の『存在の倫理』」はそれに応答しようとしたものかもしれない。

30代 「存在の倫理」というのはわかりにくい言い方だ。

年金 人はこの世に存在してしまっただけで、自己と他の存在に必ず影響を与えるので、それによる責任は免れない。それが吉本の説明するこの倫理の意味だ。仮に自由や人権が十分に守られる社会になり、それらが倫理上の課題から外れたとして

大幅に上回っている。日本全体の平均では「人種差別」も「経済停滞」ともに38%だったのに比べると、経済的な利害よりも人間の尊厳を重んじる若年層の傾向はきわだっていえると言えらる。同様の傾向は他の調査項目にもあ

も、おのれの存在自体によって生じる自己と他者に対する責任は残るという意味に受け取ることができる。どんな社会になっても残る倫理、したがってあらゆる倫理の基礎に据えられるべき倫理、「倫理の倫理」「最後の倫理」とも言うべきものとして、とりあえず理解することができる。

30代 キリスト教では「7つの大罪」として「傲慢」「強欲」「嫉妬」「憤怒」「色欲」「暴食」「怠惰」があげられている。「傲慢」には「謙虚」が、「強欲」には「施し」が、「嫉妬」には「労り」が、「憤怒」には「忍耐」が、「色欲」には「貞節」が、「暴食」には「節制」が、「怠惰」には「勤勉」が対置されている（『実用日本語表現辞典』）。

年金 それらはいずれも「欠如」を前提にしている。言い換えれば富の稀少性が生む悪徳および美徳だ。限られたパイの奪い合いが続けば、たくさん奪って威張る「傲慢」、不足を恐れる「強欲」「色欲」「暴食」、その反動としての「怠惰」、奪い去る者への「嫉

らわれていて、「気候変動の影響減のため、肉よりも野菜中心のメニューを選ぶ」は全体では27%だったのに対し、若年層では41%におよんでいる。

「人種差別」が若年層が関心を持つ社会課題のトップになったのは日本のほか、ドイツ、イギリス、アメリカで、先進国の共通の傾向となっている。資本主義の高度化とともに富の稀少性が縮減し、他国に先駆けて貧困を脱した結果と見ることができる。若い世代は生まれたときから、明日の食べ物心配する必要のない環境に育ち、生存の維持よりも、それを超えた課題に関心を寄せる傾向が明瞭と言える。

調査結果は、富の稀少性、言い換えれば「欠如」を前提にしたこれまでの倫理がゆらぎ、「充足」を前提にした新たな倫理に取って代わられる未来を暗示するデータとして読むことができる。

30代 その新しい倫理は、何を善とし、何を悪とすることになるのか。
年金 来週それを考えよう。

ニュース日記 967
中村 礼治

未来の倫理